

この詩編 78 編の言葉は、信仰が世代から世代へと受け継がれていく躍動感を見事に表現しています。わたしたちの時代の言葉で言い換えるならば、ここでは「信仰の継承」がテーマとなっています。なぜ、どのようにして信仰が継承されなければならないのか、そもそも何を継承するのか。これらは旧約聖書の時代からわたしたちの時代に至るまで、繰り返し、問われてきた課題です。

何を残し、継承すべきかを考えた人物の一人に内村鑑三がいます。彼は『後世への最大遺物』(1894年に箱根で行われたYMCA 夏期学校での講演)の中で「私に50年の命をくれたこの美しい地球、この美しい国、この楽しい社会、このわれわれを育ててくれた山、河、これらに私が何も遺さずに死んでしまいたくない」と語っています。彼は遺すべきものに考えをめぐらし、1. 金銭、2. 事業、3. 思想、4. 文学、5. 教育をあげた上で、これらには一定の才能が必要であると語ります。では、何の才能もない者に遺せるものは何か。内村はそれを「勇ましい高尚なる生涯」として講演を結んでいます。現代の言葉で言えば「生き様」と言えるかもしれません。内村の問いかけは、我々が何を継承すべきかと考える際のヒントを与えてくれるかもしれません。創立150周年を迎えようとしている同志社においても、同様の問いが投げかけられています。

教会の創立記念日は、信仰のあり方やその継承を考える絶好の機会です。ところが周りを見渡すと、若者の宗教離れは日本だけでなく、欧米でも進行しています。伝統的な礼拝だけでは若者の関心を引くことは難しく、礼拝改革や教会活動の多様化によって対応し、成功している事例もあります。何を变え、何を变えるべきでないのかを判別するのは容易ではありませんが、それはキリスト教宣教にとって不可避の課題です。

地球全体を見渡せば、若者の教会離れや教会の高齢化が進んでいる地域もあれば、たくさん若者が教会に集まり、教会が成長している地域もあります。教会のタイプで言えば、伝統教派は苦戦し、単立教会(特にペンテコステ系)が成長の牽引力となって。カトリックはトップが変われば改革も進みます。単立教会は実験的な試みを柔軟にできます。伝統的な教会は、このいずれでもありません。

教会は若者に届く言葉を語ってきたでしょうか。そもそも、一般社会に届く言葉を語ってきたでしょうか。現代において福音を語ること、信仰を継承することを、主から受けたミッションとして共に考えていきましょう。